

禁教と密かな信仰の継承

伝統と地域社会の慣習から生まれた日本特有の信仰の形

厳しい弾圧にも関わらず、潜伏キリシタンは 17 世紀中頃まで全国各地に存在した。しかし、1650 年代と 60 年代の郡（長崎）、豊後（大分）、濃尾（岐阜・愛知）で実施された一連のキリシタンの摘発と処刑により、潜伏キリシタンは主として長崎地方にのこるのみとなった。

潜伏キリシタンは指導者の下で教会歴の祝い日や忌み日に従って洗礼や葬送などの儀礼を行った。教会堂を持たなかった彼らはひそかに「帳方」や「水方」などと呼ばれる指導者の家に集まって祈りや儀式を行い、先祖の殉教地や墓地を崇拝した。

この信仰は、守り続けられている間に次第に日本の伝統の影響を受けていった。16 世紀に伝わったラテン語とポルトガル語の祈りの言葉（オラショ）は発音がなまり、一部の祈りの言葉や儀式は代々受け継がれる間に民間信仰の影響を受けて変化した。

（挿画：庄司好孝）